



ニキ・ヴァンシュマルル(中央)《聖刻1092》シリーズの主役、見習修道僧フェンが乗る。ロートルの狩猟機のように世界を司る8体の秘操兵の1体。聖剣を背負うが普段は使えないため三節棍を装備する。デザイン原案は幡池裕行氏による。

バラシュ・バラハ(右)フェンの相棒、東方の聖騎士ガルン・ストラの乗機。聖刻教会法王恩賜の品で四代にわたり継がれた別名『南部の猪』。赤銅色の重厚な装甲で典型的な東方狩猟機の様式。

アビ・ルーバ(左)同じくクリシュナ・ラプトウの狩猟機。練法に抵抗力のある銀色の鏡面装甲など西方工呪会の最新技術が盛り込まれているが、実験機であり密かな監視がつけられている。

原型製作 大輪 正和
発売 MO-CRAFT

『ロボット大河小説を紡ぐ人々』

千葉 暁 + 福地 仁

ちば さとし

ふくち ひとし

インヴォーク有限会社代表 かわい あゆみ 河合 歩

元・ロボット雑誌編集長

「こんなにもロボットをもちやす日本だから、こういう小説の存在にも脚光が当たっていいはずなんです。幡池(裕行)さんは昔から『千葉さんは小説を書くべきだ』って言っていましたよ(福地)」

ロボットに様々な形態があるように、アートや表現様式はヴィジュアルイメージ以外にも存在する。それぞれ個人でお仕事をされているライトノベル作家の千葉さんと、彼の代表作に個性的なロボットデザインを提供するメカデザイナーの福地さんを、お二人に縁の深い高田馬場の編集プロダクション・伸童舎に訪ねた。

「大学時代に玩具屋でバイトしてまして。静岡の見本市を視察したり蔵前で仕入れを任されたりしてたわけです。《ガンダム》の

最初のプラモが出るとき『10アソート仕入れましょう!』って掛け合って。1000箱ですよ(笑)。発売月こそ出足が鈍かったけれどすぐ爆発的に売れました。その快感が忘れられなかったんですね。さすがに仕入れは500個でやめとけて論まじされましたけど(笑)

同人誌やファンダム活動にもものめり込んでたんです。メカデザイナーになった明貴美加あきたかみかさんもいましたねえ。伸童舎の初代社長はラポートが出してたアニメ誌《アニメック》の小牧雅伸編集長で、当時『お茶会』と称してファンと交流する場があったんです。そのうち忙しくなった小牧さんに代わって伸童舎を手伝うようになったんですよ。指定方法を知らないから、校正が上がってきたら写植(ワープロなんて無い時代です)がバラ打ちで、それを今度はカッターと糊で貼り込んでいくという涙ぐましいことをしてま

した(笑) 家庭にビデオが普及する前のことで、アニメの名場面をコマで収録して解説を加えたビジュアル本を作ったりね。山と借りてきたフィルムから掲載用の複製カットをマーキングする毎日」福地氏がうなずく。「自分もそれやりました。あの頃の本は語りたがる書き手揃いで文字量に比例して誤植も多かったす!」こうして無数のロボットアニメ関連本や設定資料集を手掛けていく。奥付けに伸童舎や千葉さんの名前がある本を持つ読者もいるのでは?



左が千葉さんで、右が福地さん。